

斎藤喜博の教育論

鳴瀬 彰夫

斎藤喜博（1911～1981）は、日本の教師の原像ともいえる教師である。そして1960年代に「島小の教育」として有名な教育実践を主導した人物でもある。

彼が授業をどのように組み立て、教育をどう考えていたかを追及することで、教育思想のひとつの源流を探ることにしたい。

(1) 斎藤は、教育をどう捉えていたか。

斎藤は、「子どもの無限の可能性をひき出すこと」を、教育と考えている。それは、授業を通して、子どもの「能力を発達させる」ことによって可能となると述べている。しかし、著作を注意深く読むと、それはむしろ「能力の発達をとおしての人間の喜び」であり、「人間の喜び」にアクセントが置かれていることがわかる。できなかったことができるようになった時に示す子ども達の喜びを、最大限に授業の中に繰り込んでいこうとしている。

(2) 授業（特に教科指導）を中心においた教育論が展開されている。

教師が獲得した高い質の「文化遺産」つまり教材に向けて、子どもをつき上げていく教師の働きかけ、その過程が授業だとする。教材に対する教師の解釈の質が、より高い授業の質を保証するというわけである。教師の教材研究の努力に対する要求が強い。

(3) では、どのような子どもへの働きかけが

なされたのであろうか。言い換えれば、どのような教育方法をとったかの問いである。

吉田章宏は、斎藤の教育方法を「ゆさぶり」と捉えて、次のように説明している。

「一般的に言えば、授業における『ゆさぶり』とは、授業の中に緊張関係をつくり出すために行なう働きかけで、子どもを困難にぶつけ、打開させ、授業に衝突をつくりだし、事件をひき起こすような働きかけである」

（「ゆさぶり」概念の検討『教授学研究3』）
なんともわかりにくい説明である。

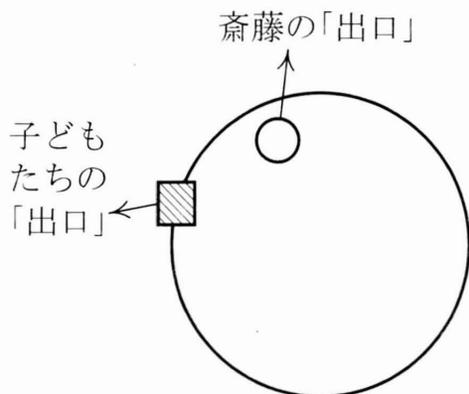
「ゆさぶり」が典型的にあらわれた授業として「出口」をめぐる指導がある。この「出口」の授業をとりあげて、斎藤の方法を具体的にみていくことにする。

小学3年の国語の教科書に次のような文章が載っていた。

あきおさんと みよ子さんは やっと森の
出口に 来ました。つかれきって速く 歩く
ことができません。

3年生の授業でこの「出口」という言葉が問題になり、さまざまな意見が出された時のことである。その話し合いの結果、「出口」は森とそうでないところの境の一点だという解釈をだして、生徒たちは喜んでた。

ところが、授業を後で見ていた斎藤は立ち上がり、黒板に向かって、次の図を書く。



子ども達は思ってもみなかった解釈に、ハッとする。注意が、斎藤に集中する。驚きの緊張がクラスにひろがる。

斎藤は子どもの一面的な読みとりに対して、自分の「出口」を対置する。生徒を困惑させ、最初に持っていた「答え」に子ども達がしがみついているようにする。斎藤は、子ども達に、別の読みとりがありうることを気づかせる。

問題は、直接には言葉のもつ意味の多様性に関わるのだが、そこには、視点の転換も要求されていた。おそらくは森に迷い込んだのであろう二人の子どもにとって、森から出られると実感で場所、たとえば木々の間から見慣れた屋根が見えた瞬間、「やった。森から出られた。家に帰れる」と叫んだことであろう。あきおさんとみよ子さんにとっては、その地点が森の「出口」なのである。

作中人物の立場から考えることが要求され、そのことが生徒たちの知的なめざめを誘発していったのである。「ゆさぶり」が、そこにあらわれている。

(4) 斎藤の発想はふつうの教師が多く抱くものである。教師は「真理」をめざして、子どもの能力をひき出す。ひき出すための働きかけのひとつとして「ゆさぶり」がある。

この「真理」と「ひき出す＝ゆさぶり」の二つを結んだ点に教育が描かれ、それを行なう者

として教師が位置づけられる。

教師は「右手に真理を、左手にひき出す力をもった人物」である。さらには「誤謬をしない人物」ともなるであろう。「教師としての教師」

しかし、現実には教師はいろいろな側面をもった存在である。

生徒の無限の可能性をひき出そうとしてしていた教師が、中学3年の3学期に入り、生徒を前にして「君の偏差値では、ランクをひとつ上げて、この高校にしたらどうだろう」と言わざるを得ない存在でもある。「矛盾に満ちた人間としての教師」をとらえ直さねばならない。

(5) 斎藤は「教育は、はかない仕事だ」と言う。この「はかなさ」の意味を最後に取り上げてみたい。

瞬間、瞬間に消えていく営みだから「教育は、はかない」と斎藤は言う。その瞬間の燃焼のなかに授業は輝く。それは「キヨラカ」な世界をつくりあげる。とすれば、「はかなさ」の裏側にある「キヨラカ」な一瞬にかけることによって、キヨラカな世界は確保される。斎藤の世界＝授業はここで充足してしまう。

教育は、はかない。確かにそうである。しかし、「はかなさ」は、その授業自体が乗り越えられること、つまり授業の中で生徒が教え込まれた内容を突き破っていく過程としてあるからである。断じて、「キヨラカ」の裏側にあるような弱々しいものではない。今あるものを、つききずして行くダイナミックさを持ちあわせている過程こそが教育なのである。